

奥羽から見た越後応永の乱

伊達氏の侵入とその背景

黒嶋 敏

The Echigo Oei Rebellion as Seen from Ou : The Invasion of the Date Clan and Its Background

KUROSHIMA Satomu

はじめに

- ①越後応永の乱の展開と幕府・鎌倉府
- ②奥羽諸氏の動向と系列化
- ③室町期の伊達領と越後
おわりに

【論文要旨】

本稿は、越後応永の乱（一四二〇年代に越後で守護上杉氏と守護代長尾氏とが衝突した内紛）に、隣国から軍事的に介入してきた陸奥伊達氏の動向を辿るとともに、そこから浮かび上がる、同時期における越後と奥羽（陸奥・出羽両国）の南部との間で展開された人的・物的交流の様相を検証したものである。

まず第一章で、乱の過程と、室町幕府・鎌倉府からの関与を確認した。幕府・鎌倉府間の対立から、守護上杉氏は幕府方に、守護代長尾氏は鎌倉府方に組み込まれており、幕府は守護方への軍事的支援を隣国にも命じていた。そのうち、実際に越後に出現した伊達氏の行動は、幕府重鎮の細川氏との関係性に基づいたものと考えられる。一方、同じ幕府重鎮でも斯波氏と繋がる出羽大宝寺氏は、鎌倉府との関係も良好だったため、中立的に動いていた可能性がある。伊達氏・大宝寺氏のような幕府重鎮を中心とした系列化は、南北朝期から進展していた全国的な動きと同様のものであることを第二章において指摘した。

当時の政治状況から実行された伊達氏の越後出兵であるが、混乱に乗じて、伊達氏は越後北部の奥山荘周辺で拠点確保の動きに出る。この点を第三章で検討し、これ以前に伊達氏が幕府から越後国内で所領を与えられていた例や、越前陶器の出土例から、伊達領国では日本海側からの物資流入が継続していたとみられる点を確認した。室町期の伊達氏は幕府との通交を維持させる必要もあり、越後との関係性を保ち続けたいと考えられるのである。

越後と伊達領国の間における人的・物的交流を前提にすると、乱における伊達氏の軍勢も、その一つに位置づけうる。越後と南奥羽との間で展開された広域的な人・モノの動きについては史料制約から不明な部分も大きいですが、さらに前後の時期にも視野を広げ、今後多角的に検討していく必要があるだろう。

【キーワード】越後応永の乱、伊達持宗、奥山荘、京都御扶持衆、足利義持

はじめに

越後応永の乱とは、一四二〇年代に、越後で守護上杉氏と守護代長尾氏とが衝突した内紛である。応永の「大乱」とも呼ばれるこの乱は、のちに戦国大名として台頭することになる長尾氏が、早くも室町期から越後国内で実権を獲得する契機となったものとして、越後中世史研究においては古くから注目されてきた。⁽¹⁾

越後国内の諸氏が二分して争いを繰り広げたこの乱で特筆されるのは、京都の室町幕府と関東の鎌倉府とが、それぞれ守護・守護代の勢力拡大を後方から支援していたことである。上杉禅秀の乱（一四一六年）後に急速に悪化した京都―鎌倉間における政治的な確執・緊張関係が、越後で現出し、同国内の武士たちの対立と結びついて抗争を助長したことになる。いわば全国レベルの対立軸が地域レベルで再生産された側面を持つのであり、この点では、全国的な政治構造を考える重要な素材となりうるものである。

乱の経過や歴史的意義についての研究は、自治体史での検討が先行してきたこともあってか、越後国内の情勢に軸足を置いた理解に止まるものが多いのだが、幕府・鎌倉府との関係のもとで、周辺諸国からも種々の支援や関与があったことが史料から浮かび上がってくる。越後の周辺地域にまで視野を広げると、また新たな状況が見えてくるようだ。それには、舞台となった越後が持つ地理的な特性も大きく影響している。当時、京都―鎌倉間の対立の煽りを受けていたのは、越後のほか、信濃や駿河、陸奥・出羽の南部にも及んでいた。かつて佐藤進一氏が幕府側の意図を「これらの地域（黒嶋注：駿河・信濃・越後・奥州南部の磐城・岩代地方）を関東の支配から切りはなして、逆に京都側で確保して、関東を監視する役割を負わせる〔佐藤進一一九九〇…一七七頁〕」と端的に

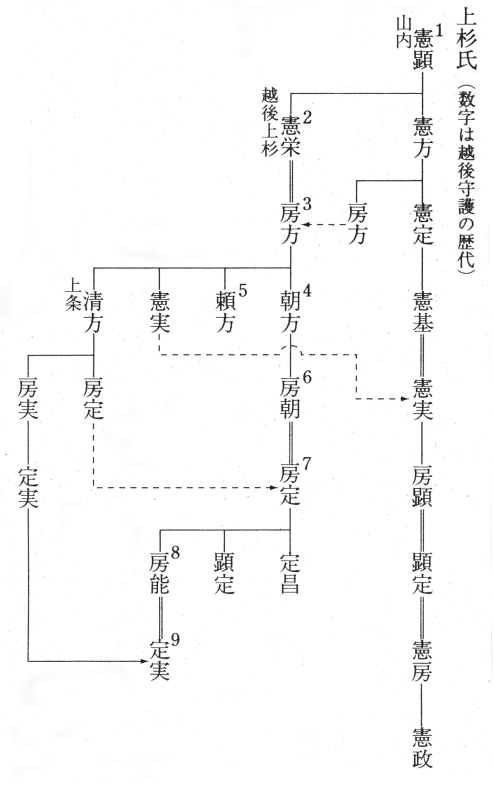
説明したように、鎌倉府の周辺国となる越後・信濃・駿河・南奥羽といった国々には幕府側の政治的意図や対立の皺寄せが色濃く現れてくる。事実、越後応永の乱においても、隣国の諸氏たちが参戦し、なかには拠点確保する動きを見せるものもあった。とくにそれは、これまで「京都御扶持衆」と呼ばれてきたような親幕府派の武家諸氏に顕著な動きであり、京都―鎌倉間の対立と越後国内の混乱に乗じて、隣国諸氏たちが連携して広域的に軍事活動を行う事例となっている。

そこで本稿では、越後応永の乱における奥羽の武家諸氏の動きに注目し、そのなかでもとくに、越後奥山荘および周辺地域における伊達氏の行動について検討していきたい。奥山荘を含む越後国北部は阿賀北と呼ばれ、歴史的にも、陸奥・出羽と深い関係を持つ地域である。乱中における奥羽の武家諸氏の活発な動きは、国境を超える広域的な人・モノの動きを考える素材としても興味深い事例となるのではないだろうか。

①越後応永の乱の展開と幕府・鎌倉府

まず越後応永の乱の流れを確認しておこう。この乱は時期的に大きく二回に分けられ、応永三〇年（一四二三）秋からの守護上杉氏派と守護代長尾氏派の衝突を第一次争乱、応永三三年（一四二六）秋からの再度の衝突を第二次争乱としている。乱を引き起こした主な要因となったのは二点あり、そのうちの一つが守護上杉家の家督継承問題であった（越後上杉氏略系図参照）。四〇年余りにわたって守護上杉氏の当主であった房方が応永二八年（一四二一）十一月に没すると、跡を継いだ長男の朝方も翌年一〇月に病死してしまふ。朝方には嫡子の幸龍丸（のちの房朝）がいたが、前年に生まれたばかりの幼児だったため、朝方の弟頼方が後見する形で実権を握り守護となった。

守護上杉氏の当主権が家督問題で動揺するのと時を同じくして、京都―



越後上杉氏略系図 ([長谷川 2005] より, 一部改変)

鎌倉間の確執が表面化し、これが乱を誘発する二つ目の要因となる。応永二九年(一四二二)、鎌倉公方足利持氏による佐竹与義らの討伐が実行に移され、関東で鎌倉公方派と反鎌倉公方派の緊張が高まっていた。これに立腹した京都の将軍足利義持は、持氏討伐を表立って口にするようになる。翌年三月には将軍職を息子の義量に譲っており、代替わりという重要な節目で、関東問題に本腰を入れようとしていた。注目されるのは、応永二九年六月と翌年三月という将軍職継承と前後したタイミングで、義持が京都の上杉邸へ御成を遂げていることである。上杉朝方・頼方の実弟である憲実が関東管領に就任しており、これに危機感を持った幕府側が、越後上杉氏を手なづけるための圧力であったと推測されている(山田一九八七)。

一方、在国して越後国内の政務を切り盛りしていた守護代の長尾邦景は、幕府に取り込まれていく守護上杉家を牽制するべく、鎌倉府に接近して事態を打開しようとした。このため、ついに幕府は、長尾邦景への治罰御教書を上杉頼方に発給する。これを受けて応永三〇年、守護方の

上杉頼藤らが中心となって、幕府公認の討伐対象となった邦景への軍事行動が越後で開始された。窮地に立たされた邦景であったが、守護方の諸氏も一枚岩の結束を保てたわけではない。とくに阿賀北の中条氏・黒川氏らの諸氏の関係は以前から円滑なものではなかったこともあり、邦景はそこに目を付けて彼らの分断を図った。こうして邦景派に転じる者が増え、勢力を盛り返しつつあったが、翌年二月、足利持氏が京都の義持に恭順の意を示し、京都―鎌倉間の関係が大きく改善したことにより、越後の混乱も終息に向かった。ここまでは第一次争乱である。

この終息は、越後の混乱を追い風に求心力を維持しようとしていた守護上杉頼方にとって、誤算を招くことになる。同年一月、京都で管領畠山満家と上杉頼方が衝突し、頼方の確保していた幸龍丸(朝方嫡子)を奪い取る事件が起きた。これにより頼方派は大きく二つに分裂し、幸龍丸に従った朝方の家臣たちは長尾邦景と接触する。

追い込まれた頼方派は応永三三年秋、国元の上杉頼藤らが主体となって、三条城の攻略へと動いた。第二次争乱の開始である。ところが戦況は邦景の優位に進み、頼方派の中心人物であった中条房資は攻め立てられ、みずからの居城を包囲される有様だった。苦境に立たされた上杉頼藤らの報告を受けて、同年一月に京都では、次のようなやり取りがされていたことが「満濟准后日記」に記されている。

〔史料1〕^①

越後国事、上杉兵部大輔弓矢、如今者無正体体歟、付之聊又被仰旨、在之、次内裏御料所事、以広橋儀同連々被仰間、種々又勅答被申之、雖爾定猶可被仰歟、所詮以此次内裏御料所事ハ一向ニサハ／＼ト辞申儀宜被思食、何様其替地事ハ可計御沙汰歟ト由被仰也、帰路ニ管領休所へ罷向、越後国事被仰子細等具申了、

義持は三宝院満済に対し、苦戦している頼藤では「じつに頼りにならない」と嘆いている(傍線部①)。これを満済は管領畠山満家に伝達し、「越後国事」に関する方針が示された(傍線部②)。その詳細は明記されていないが、これを山田邦明氏は、義持の意向が「頼方から越後守護職を取りあげ、幸龍丸を正式に守護と認め、また長尾邦景治罰の方針をとりやめて和を結ぼう、というものだったのではあるまいか」(山田一九八七・二二五頁)と推測している。

ただ義持にとつて、この時点での邦景との和睦が、そこまで現実味を帯びていたかは疑問が残る。というのも義持は、翌年春以降、信濃守護の小笠原政透に、信濃勢を率いて越後に出陣するよう命じており、引き続いて同年一〇月にも「国境」への出陣を命じている⁽⁵⁾。なお越後の混乱が継続したために、国元の頼方派だけではなく、隣国の幕府方諸氏に軍事支援を働きかけていることが分かる。

年が明けて応永三五年春になっても越後の混乱は止まなかった。同年二月、管領であり越中国守護でもあった畠山満家は、越中松岡城の普請を計画している。

【史料2】⁽⁶⁾

管領申入条々在之(中略)、
(畠山満家)

一、越中国松岡トヤラン城事、越後国事、未シカクトモ不静謐間、為彼用心此城尤簡要也、密々ニ可用意由已申付了、可得御意云々事、

この「満済准后日記」の記事により、越後の混乱に対応するべく、その「用心」のために越中で「松岡トヤラン城」の普請が計画されていることが分かる。ただ、その具体的な場所は該当しうる比定地なく明らかではない。しかし、当該部分の下書きと考えられる「満済准后日記」の別の記事では、次のように記されている。

【史料3】⁽⁷⁾

十日、(中略)管領申条々、(中略)越中国松岡トヤラン城、為越後国堺無何為用心、可取構由申付候了、時宜如何々々、
(畠山満家)

これにより、松岡城が越後との「国堺」にあり、より直接的に越後の混乱に対し「用心」するための普請計画であることが判明する。松岡城に比定しうる具体的な城郭は見出しえないが、あるいは、越中東端の押さえとして「太平記」などに南北朝期の守護系城郭として登場する、松倉城(現富山県魚津市)を指すものかもしれない。

このように応永三四年から三五年春にかけても、越後では混乱が続いていた。これ以前に守護方の頭目である上杉頼方は没落していたが、なお残党勢力が抵抗を続けていたのである。信濃・越中などの関連史料が残されていることからすれば、戦乱の舞台となった地域は越後の西部、とくに守護所のある府中などの上越地方であると推測される。

抵抗は長引いたが、越後国内で優位に立った長尾邦景の地位は揺るがなかった。しかも京都では、応永三五年正月に義持が病死している。跡を継ぐはずだった義量も三年前にこの世を去っていたため、將軍職が空位となる異例の事態となった。急遽、義持の弟である義教が還俗して將軍職を継ぐことになるのだが、幕府トップの代替わりを機に、鎌倉公方足利持氏による幕府への反発は激化していく。

だがこの時、持氏の計略を幕府に伝えたのは長尾邦景である。邦景は新將軍の誕生を機に、幕府方へ鞍替えをしたのである。邦景が幕府への忠節を誓ったことで、將軍義教―邦景の関係は急速に好転していった。永享元年七月、義教は持氏の攻勢を受けている南奥の白河氏らを救援するべく、越後・信濃の諸氏に軍勢を出すように命じている⁽⁸⁾。さらに翌年五月、長尾邦景は幕府に「越後国沙汰事」を自分に命じるように働きかけている⁽⁹⁾。持氏対策として周辺諸国の軍事動員を確保したい義教と、幕

府を後ろ盾に越後での影響力を確実なものとした邦景の思惑が合致し、両者の緊密化が進んでいくのである。

②奥羽諸氏の動向と系列化

このように越後国内の諸氏が二手に分かれて争った応永の乱では、幕府の支援する守護方は全般に劣勢であり、幕府は後方からの支援を隣国の諸氏に働きかけていた。このうち、本章では応永の乱との関係が確認・推測できる奥羽の武家諸氏について、前後の流れのなかで整理していきたい。

まずは陸奥伊達郡を本拠とする伊達持宗である。近年、室町幕府との関係性から伊達氏の位置づけを再検討された星川礼応氏によると、当時の伊達氏は「郡規模での自立的支配を展開し得た有力国人であり、幕府・鎌倉府の対立下において幕府より実力を認められ京都御扶持衆として編成された地域権力」〔星川二〇一七・三頁〕であったとされる。幕府は鎌倉府を牽制するため、鎌倉府と対立している東日本の諸氏を京都御扶持衆として取り立てていくが、そのなかでも伊達氏は、南奥羽で代表的な親幕府派の武家勢力となっていた。

その伊達氏が、越後応永の乱へも軍勢を派遣している。持宗の祖父政宗の代までに、越後と隣接する出羽長井郡が伊達領国に組み込まれており、近隣の守護方の援軍としての役割を幕府から期待されたものであろう。乱中における伊達勢の動きは、越後側で乱の当事者となった奥山荘の中条房資が、当時の状況を後年にまとめた「中条秀叟房資記録」に詳しく記されている。以下、同記録によりながら具体的に見ていこう。¹⁰

応永三〇年からの第一次争乱では、守護方の上杉頼藤らによる越後国内の守護代（長尾邦景）派の攻撃時に、伊達持宗の軍勢が参戦した。とくに奥山荘北条を拠点とする黒川基実の攻撃に際しては、「頼藤以下之

諸勢并伊達之軍兵都合五千余騎」が「黒河之城」に攻め寄せた。この頼藤らの連合軍で「伊達之軍兵」がどれほどの割合を占めていたのかは判然としない。ただ合戦の後、守護方の上杉頼藤・長尾朝景は伊達持宗に莫大な恩賞を支払わなければならなかった。それは以前からの「兼約」に従ったもので、中条房資が「伊達江軍忠之賞多之」と記すほどの規模だった。こうした恩賞からすれば、黒川氏攻略をはじめとする越後北部の軍事行動において、伊達氏の軍勢は主力となる役割を担っていたものといえるのではないだろうか。

恩賞を獲得したことで、伊達氏の関係者が奥山荘周辺に入り込んでくる。なかでも、「伊達一族滑澤ト云者」は奥山荘の北隣である荒河保に拠点を得ただけでなく、黒川館に「夜打」で襲撃をかけ黒川基実を切腹に追い込んだ。さらに伊達氏の軍勢は、混乱に乗じて奥山荘の古利である乙宝寺へも乱入し、「乙宝寺之舍利」を略奪し「他国」へ持ち運んだのである。記主である中条房資から見て伊達氏の軍勢は、他国からの侵入者であるだけに、ここで記された行動は一定程度の事実を反映しているものと考えられよう〔中野一九八八〕。このように伊達勢は、守護方軍勢の主力となって敵対する諸氏を攻撃していただけでなく、奥山荘とその周辺において、積極的に権益を広げようとしていたのである。

守護代方への攻勢は「結果的に伊達氏の越後侵攻」〔長谷川一九九五・一五頁〕とも評価されるほど苛烈なものであったが、その大義名分となったのは幕府との関係性である。既述のとおり伊達氏は鎌倉府の圧力に抵抗するため、幕府と連携を深めていた。伊達氏と幕府を結びつける役割を果たしていたのは、幕府の前管領だった細川満元とその子持者だったのではないだろうか。第一次争乱が鎮静化した応永三一年一月、京都で管領畠山満家と上杉頼方が衝突した際に、「前管領細川（満元）八上杉最貞」とされ、細川満元は上杉頼方に肩入れしていた。また細川氏と伊達氏の関係の深さは、これまでも指摘されている。満元が死んだ応

永三三年一〇月以降、子の持之が細川氏当主となるが、持之は伊達氏の取次を担当していた（金子二〇〇二）。また正長二年に、足利義持の遺品を有力諸氏に送達しているが、陸奥では篠川公方足利満直のほか、伊達氏、蘆名氏、白河氏、塩松石橋氏に配分しており、それを諸氏に伝達する役割を担ったのも細川持之である⁽¹²⁾。幕府と鎌倉府との緊張が高まる時期に、細川持之は伊達氏をはじめとする南奥羽の親幕府方の有力諸氏と、密接に連絡を取り合っていた。越後応永の乱において、守護方の援軍として伊達氏の軍勢派遣を進めたのも、細川氏と考えるのが自然であろう。

上杉頼方と伊達持宗との仲介役として細川氏を想定することで、さらに整合的に解釈しうるのが、「満濟准后日記」にある次の記事である。

【史料4】⁽¹³⁾

一、上杉兵部大輔所領事、越後守護代長尾入道及異儀、度々被仰出^(邦歌)処、不及遵行、殊以不可然、所存又以外也、不日可渡付、此間又自^(持宗)伊達方、以竹林院坊主（伊達婦依僧云々）態申入旨、右京大夫申入^(細川持之)也、若猶長尾不去渡者、随上意可入部云々、然者可及弓箭敷、旁無勿体旨、同可仰付云々、（中略）此等条々来八日出京時、可申付旨承了、自畠山・山名・管領等方使者来、悉重事間令対面直問答了、及西半刻過歸寺了、

第二次争乱後、上杉頼方は没落して浪々の身となるが、その頼方の旧領をめぐって、幕府に交渉をしたのが伊達持宗であった。持宗は細川持之を窓口として交渉の依頼をしており、もし守護代長尾邦景が明け渡さないならば、「上意」を盾にした実力行使をも辞さないとして所領回復に尽力しているのである。史料のこの部分だけ切り取っただけでは、なぜ持宗がここまで肩入れをするのか不可解な点が残るが、越後応永の乱

において持宗が細川氏の仲介によって守護方として参戦したという経緯を踏まえれば首肯しうる。約十年に及んだ越後守護上杉氏の家督問題のなかで、細川満元・持之父子と上杉頼方・伊達持宗は連携して行動しつづけていたことになるう。

以上のように、細川氏との関係性をもとに守護方として参戦した伊達氏のような事例がある一方で、奥羽には、守護代派となる諸氏も存在していたと推測される。その具体例が、出羽庄内地方の大宝寺氏である。さきほどの「中条秀叟房資記録」によれば、守護方の伊達勢らによって襲撃を受けた黒川基実の嫡男は、中条房資の取成で出羽大宝寺へ逃れ落ちていった⁽¹⁴⁾。また、第一次争乱の戦後処理で、黒川惣領家の本領は守護代の長尾邦景から安堵されており、黒川氏が守護代方であることは確実であるため、その嫡男の逃避先となった出羽大宝寺氏もまた、もともと守護代長尾邦景と連携していた可能性が出てくる。この点を、当時の大宝寺氏の状況から考えてみたい。

大宝寺氏は、奥羽二国が鎌倉府の管轄となった明德二年（一三九一）以降、鎌倉府内では山内上杉氏との関係を深めており、さらに遡ると、康安元年（一二六一）に山内上杉氏が出羽大泉莊地頭職を獲得して以来、両者は、親密化していたものと考えられている（杉山二〇一四）。越後応永の乱でも、第一次争乱の勃発直後に鎌倉公方足利持氏は、山内上杉氏領である越後上田莊の確保のため周辺諸氏に出陣を命じており、山内上杉氏や出羽大宝寺氏は、ともに鎌倉府との関係が良好であったとして良いだろう。

ただし、大宝寺氏が京都の幕府と全く没交渉だったわけではない。この時期の前後の大宝寺氏当主（教氏―淳氏―健氏）の名乗りは、いずれも、幕府管領家の斯波氏当主（義教―義淳―義健）から一字偏諱を受けていたものと指摘されている（家永一九八五）。斯波氏当主の名乗りの下の一字を、大宝寺氏が名乗りの上の一字に用いていることから、大宝寺

氏と斯波氏は一種の主従関係にあったといえるだろう。

また、大宝寺氏と斯波氏の関係を考えるうえで一つの示唆を与えてくれるのは、佐渡国守護職の問題である。佐渡は、出羽庄内地方から見ると対岸に位置し、京都との海上交通における地理的な要地となる。その守護職は、永享十一年（一四三九）時点で斯波千代徳（義健）が保持していたことが明らかとなっている（田中二〇一一）。これ以前の守護職については明示する材料はないものの、斯波千代徳はこの時五歳にすぎないので、新規補任である可能性は低く、これ以前に父祖が補任された守護職を相続し安堵されたものと考えるのが自然である。千代徳の父義郷は永享六年（一四三四）に兄義淳の跡を受け斯波氏当主となったが、翌々年には死去しているため、当主としての在任期間は短い。斯波氏の佐渡守護職獲得はそれよりも以前の、斯波義教・義淳父子の時期まで遡りうる可能性がある。同時期に斯波氏が、北陸道では越前・加賀に分国を確立させつつあったことや、斯波氏当主が大宝寺氏へと偏諱を与えていることは、斯波氏による日本海側の各地への影響力の浸透として共通する側面を持つものといえよう。

しかも越後応永の乱の時に、斯波義淳は鎌倉府と融和・協調する方向で行動しており、山内上杉氏とも良好な人的関係を築いていた（家永一九八五）。越後国内で守護方と守護代方との対立が激化するなか、行き場を失った黒川惣領家の嫡男にとつて、京都の斯波氏・鎌倉の山内上杉氏と強いパイプを持つ大宝寺氏のもとへ、身近な逃避先として安全性が高いものと判断されたのではないだろうか。

以上、本章では越後応永の乱における伊達氏・大宝寺氏の関わりを検討してきた。越後国内の諸氏が守護方・守護代方に二分して繰り広げた抗争が、幕府・鎌倉府の対立関係と連動していたために、隣接する伊達氏・大宝寺氏も大きく関与するところとなった⁽¹⁵⁾。その背景には、南北朝期から幕府内部で生じていた確執があり、地方武家諸氏においても斯波

派・細川派へと収斂していく系列化が進んでいた（小川一九八〇）。伊達氏や大宝寺氏の事例からは、斯波氏や細川氏といった幕府重鎮との関係性が、地方諸氏においてはみずからの政治的な帰趨を方向づけていたものといえるだろう⁽¹⁶⁾。

ただそのなかでも伊達持宗の場合は、実際に越後へ軍勢を送り込み、混乱に乗じて権益の拡大を図ろうとするなど、越後に対する関心の高さを見て取ることができる。この点について、次章では応永の乱から少し視野を広げ、室町期における伊達氏と越後との関わりをなかで検討してみよう。

③ 室町期の伊達領と越後

じつは持宗以前、祖父政宗の代から、伊達氏は越後に所領を持っていた痕跡がある。室町幕府と鎌倉府の対立が激化し、幕府方へ伊達政宗が与した際、その見返りとして政宗は將軍足利義満から「美濃国きんたんし・若木・吉家・越後梶原わたり半分」を宛行われた⁽¹⁷⁾。この記事は「余目氏旧記」という後世の編纂物のものであるため、これまで疑問視されてきたが、近年の星川礼応氏の研究によると、美濃国の所領は「城田寺（きだいじ）郷」ほかに比定される。いずれも美濃守護所のある革手近郊で、文明一五年（一四八三）に伊達成宗（持宗の子）が上洛した際にも、美濃守護の土岐成頼と「三ヶ郷」に関して交渉しており、星川氏は城田寺郷など三ヶ所が、室町期の伊達氏の所領として相伝されていたものとしている（星川二〇一七）。

これによれば、幕府から伊達政宗に宛行われた「越後梶原わたり半分」も実在の土地である可能性が高い。星川氏は「梶」を「かん」と読んだうえで「越後国蒲原郡の渡」とする可能性を指摘している（星川二〇一七・注三八）が、「わたり」が川の渡河点であることや、越後応永

の乱時における伊達勢の動きなどから類推されるところでは、あるいは飯豊山地から新潟平野を流れる加地川（加治川）流域の渡河点が想定されるだろうか。加地川流域に展開した加地荘は奥山荘の南隣の荘園で、南北朝期には「加地庄沼垂湊」と記す文書もあるなど、越後沿岸部の主要港湾である「沼垂湊」との関わりも深い。残念ながら「梶原わたり」に相当する地名は管見に入っていないが、この加地川流域は近世以降にたびたび瀬替えや干拓といった大規模土木工事が行われ地形が改変されているため、その遺称地がすでに消滅した可能性がある。

この「越後梶原わたり半分」と、応永の乱時における奥山荘での伊達勢の動き、さらには第一次争乱後に持宗が「軍忠之賞」として獲得した所領の一つに荒河保があることを合わせて考えると、越後北部において伊達氏の企図したのが見えてくるようだ。

すでに水澤幸一氏らにより指摘されるように、連続した大小の河川と潟湖が網の目のように広がる中世の越後平野では、河川交通が大きく発達していた（水澤二〇〇六、ほか）。そのなかで、越後北部の荒河保から奥山荘を経て加地川を南下し、さらに越後府中に至るルートは、北陸道の主要ルートである。文明一八年、伊達成宗が家臣の「桜田隠岐守」を越後府中へ派遣した際には、奥山荘の「築地」、奥山荘と加地荘の境にある「藤塚」を経由している⁽¹⁹⁾。「築地」は上杉房定の娘が伊達尚宗に輿入れする際にも宿泊地となっている⁽²⁰⁾。さらに永正一五年（一五一八）には、幕府への進物と

して馬を届けるために日本海沿いを京都に向かった伊達氏使節一行も、「のつたりのわたしもり」「かんはらの舟もり」で通行料を支払っており、やはり越後平野の河川交通を利用していたものと推測される⁽²¹⁾。伊達氏にとって、越後国内の平野部、それも伊達領国に近い越後北部に拠点を確保しておくことには大きな意味があった（図1参照）。

伊達氏のほかにも、内陸部にあつて親幕府派という共通項を持つ南奥羽の諸氏には、越後に拠点を獲得しようとした痕跡が残る。たとえば幕府から鎌倉公方足利持氏の對抗馬として期待されていた篠川御所足利満直は、永享三年（一四三一）に幕府に働きかけて、越後国紙屋荘の安堵を得ようとしていた⁽²²⁾。また、その足利満直を支えていた京都御扶持衆の

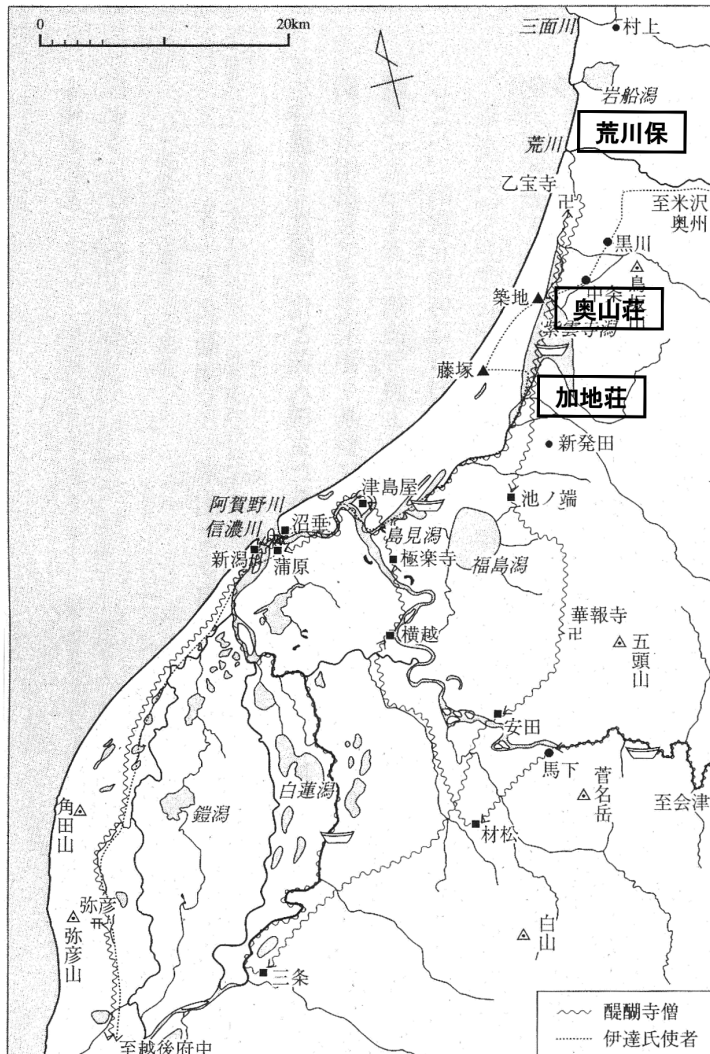


図1 越後平野略図（[長谷川 2005] より、黒嶋加筆）

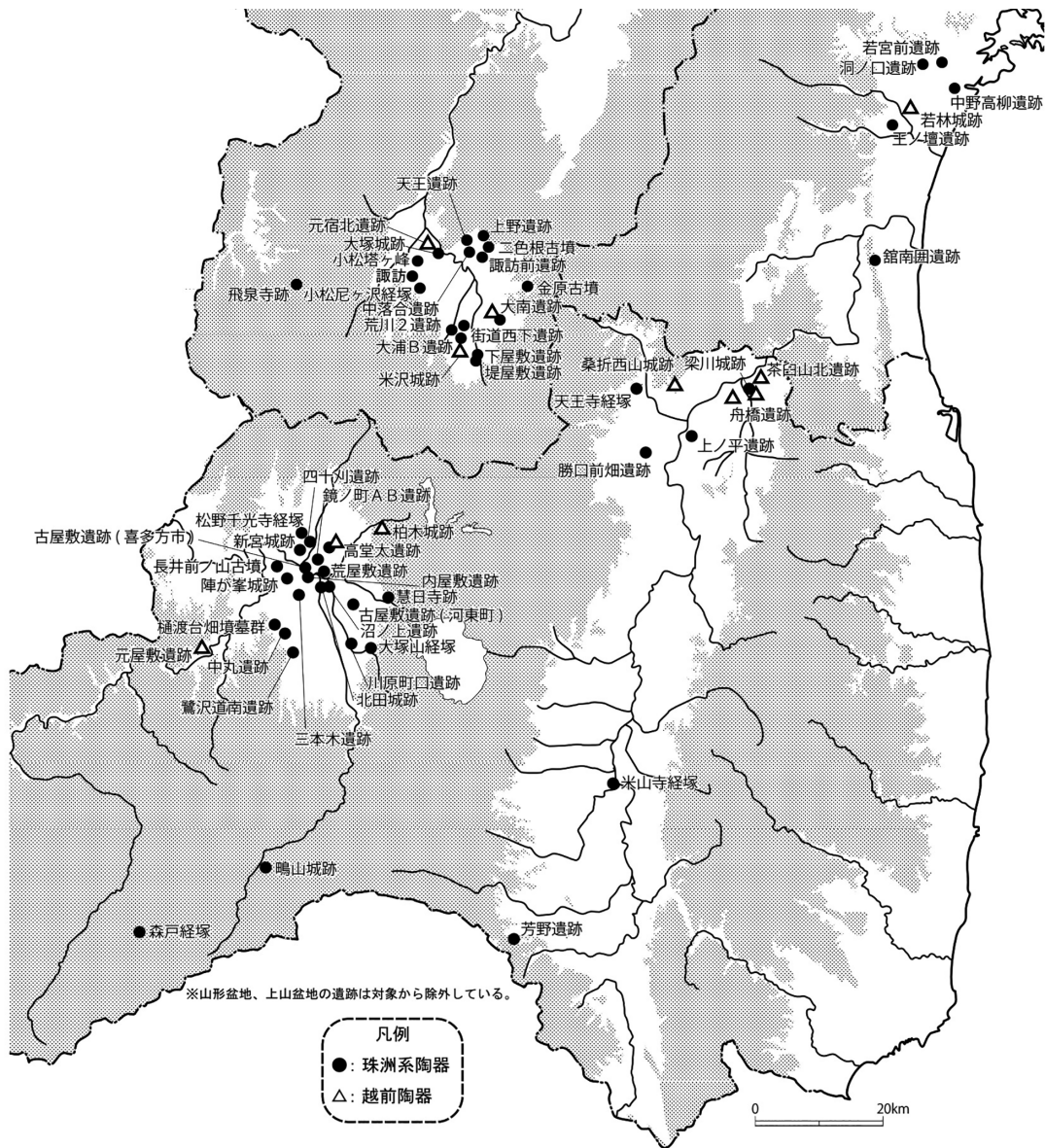


図2 南奥羽における珠洲系陶器・越前陶器の出土遺跡 ([佐藤 2019] 第2図より)

なかでも最大の勢力を誇る南陸奥の白河氏朝は、永享一年(一四三九)に幕府から越後国蒲原津を宛行われてい⁽²³⁾る。いずれも幕府による鎌倉府対策としては一連の動きで、幕府方については南奥羽の諸氏に越後で所領を与えたものといえる。これらは応永の乱を経て、越後に幕府側の影響力が浸透したことによる結果であろう。

越後での所領安堵は、南奥羽内陸部の幕府方諸氏に対する懐柔策として一般化されるのだが、そのほかに伊達氏ならではの事情もあったようだ。この点を考古学の発掘調査成果に学びながら考えてみたい。中世の南奥羽における珠洲系陶器・越前陶器の出土状況を取りまとめた佐藤俊氏の研究によると、会津盆地・福島盆地・米沢盆地・仙台平野南部に出土が集中する傾向にある(図2参照)。珠洲系陶器は能登で、越前陶器は越前で生産される中世陶器であり、全国的に見て、一五世紀頃に珠洲系陶器の流通圏を越前陶器が踏襲していくとされる。南奥羽でも、珠洲系陶器の吉岡Ⅳ・Ⅴ期(一三世紀末〜一五世紀)、および越前陶器の木村Ⅳ・Ⅴ期(一五・一六世紀)は、

出土する地域に重なりが見られ、この地域における日本海側からの恒常的な物流がほぼ継続していたことを示すものと考えられる〔佐藤俊二〇一九〕。これらの地域のうち、多くの点数が報告されている会津盆地・米沢盆地については、それぞれ阿賀野川水系・荒川水系で越後に通じており、地理的条件からも日本海側の物流の影響を受けやすいことは首肯されよう。

ただ例外的なものが、地理的に越後と接していない福島盆地である。持宗以降の伊達氏が本拠とした梁川城跡と周辺から出土する越前陶器については飯村均氏の注目するところであったが〔飯村二〇〇九〕、さらに佐藤氏は、福島盆地の越前陶器は「出土遺跡の性格は城館や居館がすべてで、集落からの出土は認められない」としている〔佐藤俊二〇一九：六頁〕。その一方で、篠川公方のいた郡山盆地や白河氏の本拠である白河盆地では、越前陶器は検出されていない。ここから、福島盆地（陸奥国伊達郡・信夫郡）を本拠とする伊達氏が、日本海側から流入する物資の求心力を持っていたと想定することは許されるのではないだろうか。しかも室町期の伊達氏は、米沢盆地（出羽国長井郡）も領国としていた。越後から荒川水系などを経て米沢盆地まで入った物資が、さらに奥羽山脈を越えて、福島盆地へと入り込んだものと考えられる。

越後から伊達領へと至る恒常的な物流ルートが機能していたとすれば、必然的に人的交流も高まる。室町期伊達氏に関する文献史料のなかに痕跡を探っていくと、たとえば宝徳三年（一四五二）には奥山荘の「高野北」氏が伊達氏のもとに出奔する事件が起きている。²⁴越後応永の乱後も伊達氏が奥山荘内において何らかの権益を確保していたことを反映している。また、同時代史料では必ずしも明らかではないが、後世の伊達氏の家譜によれば、陸奥梁川の輪王寺は、嘉吉元年（一四四一）に伊達持宗が祖母蘭庭尼（政宗の室、足利義満夫人の妹）の願いを受け、越後耕雲寺六世の太庵梵守を開山として建立したという縁起を持つ

〔伊達正統世次考〕巻之五、持宗。その翌年に蘭庭尼が没すると、持宗は五男（天初薬源）を同寺三世とするが、のち天初薬源は越後耕雲寺九世となり、越後岩船郡指合村の光明寺を開いたとする。持宗周辺と越後曹洞宗との頻繁な人的交流が浮かび上がってくる。

以上を勘案すると、南奥羽のなかで伊達領国はとくに、越後からの人物の流れが活発であったことになる。換言すれば、伊達領国は越後という経済圏・文化圏の後背地に位置づけられるだろう。伊達氏にとって越後は、経済的には領国への流通を日本海の海上交通とリンクさせるためにも、伊達氏が渴望してやまない場所だったと考えられる。

また政治的な側面では、伊達領国と越後との結びつきを支えていたのは、伊達氏による室町幕府との通交であったと考えられる。政宗の拝領した「越後梶原わたり半分」も、持宗時の越後への援軍派遣の結果としての獲得した荒河保なども、いずれの越後の所領も幕府が直接・間接に関与したうえで伊達氏が獲得したものである。また、持宗以後の伊達氏は代々、將軍からの一字偏諱を得ており、持宗・成宗父子は上洛も遂げている。伊達氏は当主の権威を高める梶子として將軍との関係性を利用しており、その円滑な通交を維持するためには、越後にも所領を確保しておく必要があった。

持宗の孫の尚宗の代になると、より直接的に越後の上杉氏と連携するようになる。尚宗には越後守護上杉房定の養女が興入れを果たし、以後、伊達氏と上杉氏との間にはお互いの必要時には援軍を派遣する「合力」の関係が形成されたのである〔長谷川一九九五〕。ただし、この「合力」関係は、姻戚関係だけでなく、明応の政変の副産物である可能性がある。明応二年（一四九二）、京都を追われた將軍足利義植が越中に入ると、越後上杉氏をはじめとした周辺諸氏に対する多数派派工作を展開しており〔家永二〇〇七〕、伊達尚宗もそれに与していたものと考えられている〔黒嶋二〇一四・二〇一七〕〔星川二〇一七〕。京都の將軍家の分裂とい

う緊迫した状況において、伊達氏と上杉氏の連携が、より直接的な軍事同盟へと変質したものといえよう。

このように一五世紀における伊達氏は、越後との深い関係性を保持し続けたといえる。その大きな契機となったものが、越後永の乱における援軍派遣と、その恩賞として獲得した越後北部の所領であった。詳細は省略するが、尚宗の子植宗の代にも越後との関係性は続き、ついには植宗の子時宗丸を越後上杉氏へ養子に送り込もうとするが、計画は失敗し伊達家中は深刻な分裂状況に陥った（伊達氏天文の乱）。一六世紀に入っても越後への対応は、伊達氏の政治・外交にとって大きな意味を持ち続けたのであった。

おわりに―京都と奥羽の交通インフラの質的変遷―

以上、本稿では越後永の乱時における伊達持宗の軍勢の動きを中心に、その政治的な背景とともに、伊達氏側における越後への関心の高さを検討してきた。伊達持宗は幕府の重鎮細川氏を介して守護方の支援を要請されたものと推測され、これを好機として、奥山荘をはじめとした越後北部で所領を獲得したと考えられる。以後の伊達氏は越後との関係性を保ち、これを幕府通交の一助としていたのである。

こうした事例は、幕府との関係性が円滑に機能している場合は、室町期においても他国に所領を獲得する機会があったことを示している。ただし、伊達氏の本拠とした福島盆地と奥山荘の距離は約百キロに及び、遠隔地の所領をどのように経営していたのかは史料に明らかではなく今後の課題とせざるを得ない。そのなかで一つ指摘しうるのは、持宗の時期はまだ、物流・交通の社会基盤が戦国時代に比べると順調に機能していたと考えられることだ。

この点を、書状の到達速度という点で比較してみよう。持宗と同じ時

期、南陸奥の篠川御所足利満直の書状は、二〇日で京都に到着している。⁽²⁵⁾ところが戦国時代になると、上杉謙信（越後府中）と織田信長（岐阜）の間の書状は、片道二三日を費やしている。⁽²⁶⁾さらに遠距離の伊達輝宗（出羽米沢）と信長の間では、片道約二カ月もかかっている。⁽²⁷⁾運搬時間には季節や天候の問題、あるいは書状の重要性などといった諸要因も影響しうるものであり、単純比較は難しいのだが、それでも、室町時代は戦国時代よりも物流・交通の社会基盤が安定していたとすることができるとはならないだろうか。

こうした物流・交通の社会基盤が、時には軍勢を運ぶことになる。越後永の乱時における、伊達勢をはじめとした他国からの広域的な軍勢の動きも、これに支えられたものである。中世前期の広範な人・モノの動きがまだ継続する段階として、室町期の地域社会を考えていく必要があるだろう。

註

- (1) 越後永の乱を検討した研究は数多いが、代表的なものとして、「羽下一九九五」、「佐藤博信二〇〇六」、「山田一九八七」、「田村二〇〇四」などが挙げられる。
- (2) 「満済准后日記」〔統群書類従〕補遺二 応永三二年二月三日条
- (3) 「看聞日記」〔統群書類従〕補遺二 応永三一年一月二六日条
- (4) 前掲註(2) 「満済」 応永三三年一月十七日条
- (5) (応永三四年) 二月一六日付、足利義持御内書（東京大学史料編纂所影印叢書 四 小笠原文書）第三帖一八号、八木書店、二〇〇八年、(同年) 六月二九日付、足利義持御内書（同書第三帖一九号）、(同年) 一〇月二六日付、足利義持御内書（同書第二帖一五号）。
- (6) 前掲註(2) 「満済」 応永三五年二月一〇日条
- (7) 「天日本古文書 醍醐寺文書別集 満済准后日記紙背文書」一三三三号、(応永卅五年二月) 准三宮満済日記
- (8) 前掲註(2) 「満済」 正長二年七月一日条
- (9) 前掲註(2) 「満済」 永享二年五月二八日条

- (10) 「中条秀叟房資記録」『新潟県史 資料編第四巻』一三一六号
- (11) 前掲註(3)「看聞」応永三一年一月二六日条
- (12) 前掲註(2)「満濟」正長二年四月二六日条
- (13) 前掲註(2)「満濟」永享三年六月六日条
- (14) 前掲註(10)「中条秀叟房資記録」
- (15) なお史料的には明証を欠くが、伊達氏と同様に細川氏を取次としていたと考えられる会津の蘆名氏についても、越後応永の乱への関与を想定しうる。乱と前後して、蘆名氏は同族の新宮氏と抗争を繰り返している。新宮氏は越後加地莊五十公野へ逃亡したといひ(『会津旧事雑考』)、その後、越後国小河荘内の蘆名氏の拠点へ攻撃を仕掛けていた(『塔寺八幡長帳』)。こうした蘆名氏と新宮氏の抗争は、越後応永の乱の余波であった可能性がある。
- (16) 奥羽など関東周辺諸国の諸氏の政治的立場については、たんに親幕府派であることのみを指標とした「京都御扶持衆」という把握のみではなく、どの幕府重鎮と関係性を築いていたかという点が大きき影響を与えていたことになる。
- (17) 「余目氏旧記」(『仙台市史 資料編二』余目家文書一六号)
- (18) 建武三年一月一八日付け、羽黒義成軍忠状写(『奥山庄史料』所収中条文書、『新潟県史 資料編四』中世二一九三五号)
- (19) (『文明十八年』八月三日付け、羽黒房義書状(『山形大学所蔵中条家文書』、『新潟県史 資料編四』中世二一九〇二号)。年次比定は「長谷川一九九五」による。
- (20) (『文明十八年』一月二二日付け、中条朝資書状(『山形大学所蔵中条家文書』、『新潟県史 資料編四』中世二一九〇〇号)。年次比定は「長谷川一九九五」による。
- (21) 永正一五年二月三日付け、願神軒存算用状(『大日本古文書 伊達家文書』八〇号)
- (22) 前掲註(2)「満濟」永享三年二月二九日条
- (23) 永享一一年一〇月一〇日付け、細川持之施行状(『東京大学白川文書』、『白河市史 第五巻資料編二』古代・中世四九九号)
- (24) (宝徳三年)八月二三日付け、飯沼頼泰書状(『反町英作氏所蔵文書三浦和田黒川氏文書』、『新潟県史 資料編四』中世二一四一四号)
- (25) 前掲註(2)「満濟」正長二年九月二日条に「同日又自佐々川以山臥御注進、八月十日歎日付注進、一昨日晦日京着了」とある。
- (26) (永祿一一年)七月二九日付け、織田信長書状「去六日芳問一(志賀横太郎氏所蔵文書)、『上越市史 別編一上杉氏文書集』六一〇号)、(天正三年)六月一三日付け、信長書状「去月十九日書札、今日令披閱候」(『謙信公御書集』『上越市史 別編一上杉氏文書集』一二五五号)
- (27) (天正元年)二月二八日付け、織田信長書状「去十月下旬之珍簡近日到来」

おもな参考文献

- 安部俊治 二〇一〇年「一六世紀後期伊達領長井・越後間の交通路と支城主」『年報都市史研究』一七
- 飯村 均 二〇〇九年「中世奥羽の考古学」高志書院
- 家永達嗣 一九九五年「室町幕府將軍権力の研究」東京大学日本史学研究室
- 二〇〇七年「足利義材の北陸滞在の影響」加能史料編纂委員会編『加賀・能登 歴史の扉』石川史書刊行会
- 小川 信 一九八〇年「足利一門守護発展史の研究」吉川弘文館
- 金子 拓 二〇〇二年「室町幕府と奥州」柳原敏昭・飯村均編『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院
- 黒嶋 敏 二〇一四年「室町幕府と遠国・境界―二つの將軍家―再考」(川岡勉編『中世の西国と東国』戎光祥出版)
- 二〇一五年「京・鎌倉と東北」(白根靖大編『東北の中世史三』室町幕府と東北の国人)吉川弘文館
- 二〇一七年「二つの將軍家」と奥羽の連歌師『東北中世史研究会会報』二四
- 佐藤進一 一九六七年「室町幕府守護制度の研究 上」東京大学出版会
- 一九九〇「守護制度史上の信濃」(同著『日本中世史論集』岩波書店、初出一九六八)
- 佐藤 俊 二〇一九年「東北地方南部地域における珠洲系・越前陶器の様相」北野博司先生還暦記念事業実行委員会編『日は好日 北野博司先生還暦記念論集』北野博司先生還暦記念事業実行委員会
- 佐藤博信 二〇〇六年「越後応永の内乱と長尾邦景」同氏著『越後中世史の世界』岩田書院(初出一九七六年)
- 杉山二弥 二〇一四年「室町幕府の東国政策」思文閣出版
- 二〇一五年「伊達政宗の乱の展開と稲村公方・篠川公方」『関東足利氏の歴史第三巻 足利満兼とその時代』戎光祥出版
- 田中 聡 二〇一一年「南北朝・室町期における佐渡守護と本間氏」『新潟史学』六六号
- 田村 裕 二〇〇四年「越後応永の大乱」『上越市史 通史編二』上越市
- 中野登任 一九八八年「忘れられた霊場 中世心性史の試み」平凡社
- 長谷川伸 一九九五年「南奥羽地域における守護・国人の同盟関係」『地方史研究』

二五四

二〇〇五年「地域社会の自立にむけて」池享・原直史編『街道の日本史

二四 越後平野・佐渡と北国浜街道』吉川弘文館

羽下徳彦 一九九五年「越後における守護領国の形成」同氏著『中世日本の政治と史

料』吉川弘文館（初出一九五九）

星川礼忠 二〇一七年「奥州伊達氏と室町幕府」『歴史』一二九

水澤幸一 二〇〇六年『日本の遺跡一五 奥山荘城館遺跡』同成社

二〇一五年「蒲原平野の遺跡分布からみた潟と河川」『日本海沿岸の潟湖
における景観と生業の変遷の研究（島根県古代文化センター研究論集）第

一五集』

山田邦明 一九八七年「応永の大乱」『新潟県史 通史編二 中世』新潟県

（東京大学史料編纂所、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇二二年一月二一日受付、二〇二三年五月二二日審査終了）

The Echigo Oei Rebellion as Seen from Ou : The Invasion of the Date Clan and Its Background

KUROSHIMA Satoru

This paper traces the movements of the Mutsu Date clan (陸奥伊達氏), who intervened militarily from neighboring countries, in the Echigo Oei War (越後応永の乱, an internal conflict between the Uesugi clan, the shugo of Echigo, and the Nagao clan, the shugo, in the 1420s), and what emerges from this, which examines the aspects of human and material exchanges that took place between Echigo and the southern part of Ou (奥羽, the two countries of Mutsu and Dewa) during the same period.

At that time, the Muromachi shogunate (室町幕府) and the Kamakura-Fu (鎌倉府) were in a political dispute, and Shogun Ashikaga Yoshimochi (足利義持) supported the Shugo Uesugi clan. It is believed that the Date clan headed for Echigo under the direction of the shogunate. However, the Date clan took advantage of the confusion and secured territories such as Okuyama-no-syo (奥山荘) in northern Echigo. Even before that, the Date clan was associated with the shogunate and became a member of the Kyoto Gofuchishu (京都御扶持衆), who received special support. Based on this relationship, the shogunate gave the Date clan territory in Echigo, and the distribution from the Sea of Japan side reached the Date clan's territory via Echigo, so the Date clan had a relationship with Echigo. It is thought that the Mr. Date's departure for the front also needs to be considered in the context of such wide-ranging movement of people and goods.

Key words: Echigo Oei War (越後応永の乱), Mutsu Date clan (陸奥伊達氏), Okuyama-no-syo (奥山荘), Kyoto Gofuchishu (京都御扶持衆), Ashikaga Yoshimochi (足利義持)